



# オスマンのパリ改造計画における緑地計画の理念及びその実態について

佐々木 邦博\*

L'idée et la réalité du système des espaces verts de Paris par Haussmann

Kunihiro SASAKI

摘要：19世紀中葉に実施されたオスマンによるパリ改造計画には緑地計画が重要な一部門として含まれている。緑地をその規模により三種類に区分して考え、それぞれをバランスよく市街地及びその周辺に配置した。一つのシステムとしてとらえられていたものであり、緑地システムの実現においせは世界でも最も初期の例の一つであろう。そこでこの緑地計画の理念、及び緑地がどのように利用され、社会生活に影響を及ぼしたかを考察する。

## 1. はじめに

1848年、フランスにおいて二月革命が起こる。王政が倒され、共和政の政治形態をとる。大統領選挙の結果、ナポレオンの甥にあたるルイ・フィリップが当選したのだが、彼は1851年にクーデタを起こし、皇帝として即位する。自らナポレオン三世（NAPOLEON III、在位1852 - 70）と称し、第二帝政を開始するのである。彼が権力を掌握して以来実行し始めた政策の一つとしてパリの都市改造があげられる。当時パリは中世の面影が色濃く残る複雑に入り組んだ道からなる都市であったのだが、それを根本的に改造しようとしたのだ。この計画は多岐にわたるが、重要な部門の一つに緑地計画がある。パリに緑地を組織的に配置する計画である。都市改造が進められていく中でこの計画の実現化は人気を呼ぶものとなり、パリに華やかな魅力を与えていく。この都市改造には当時から様々な批判が行われてきたが、この改造の中で建設後に多大な絶賛を受け、反対論が消滅したのは緑地計画であった。辛辣な作家であるジョルジュ・サンド（George SAND, 1804 - 76）も著作の中で新しく建設された緑地を絶賛している程である。<sup>1)</sup> そしてこの都市改造こそが今日のパリの根幹を形成しているのである。

その結果この第二帝政期という時代にはいくつもの緑地が造成されたのだが、拙論ではまずこれらの緑地の概容を把握し、緑地全体を鳥瞰する。そして次に当時これらの緑地が持った性格、特徴を見ていきたいと思う。そこから19世紀に都市の緑地が持っていたイメージをできるかぎり明確にしていきたいと考える。

## 2. 緑地の概要

ジュールジュ・ユージェヌ・オスマン（George Eugène HAUSSMANN, 1809 - 91）がナポレオン三世によりセーヌ県知事に任命されたのは1853年のことである。その当時、パリ市長の職は設けられてはいなかったため、セーヌ県知事がパリ市長の役割を兼ねていた。彼がこの職に就いた時、パリ改造事業の端緒はすでに開かれていたが、緑地についてもブローニュの森（bois de Boulogne）の改造工事が始められていた。まず最初に計画され、大評判となり、いわば緑地計画に先鞭をつけ、引き続き建設される緑地に新しいイメージを供給したのはこのブローニュの森なのである。この森からとりあげてみたい。

ブローニュの森の改造はオスマンの着任以前から始められていた。担当者はナポレオン三世の父の領地であるサン・ルー（Saint - Leu）で庭師をしていたヴァレ

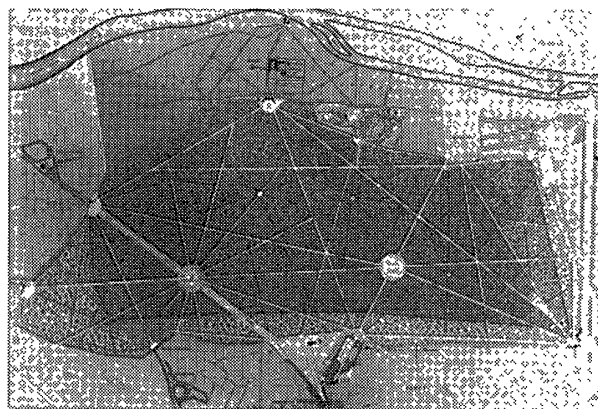


写真-1 改造以前のブローニュの森

\* 信州大学農学部

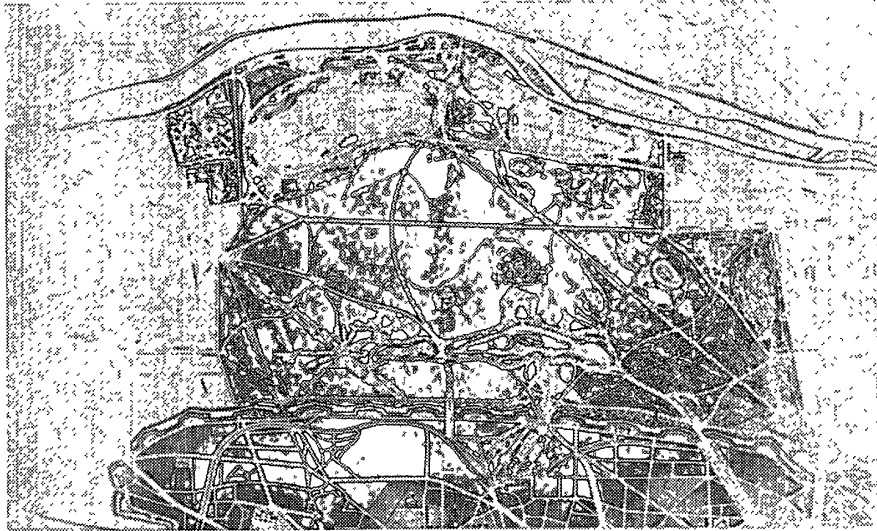


写真-2 改造後のブローニュの森

(VARÉ, ?-?)である。その時の計画はこの森の東側、つまりパリの市街地よりも川及び川を巡る園路を造成するものであった。オスマンはまもなくこの計画の欠陥を発見する。レベル測定の結果、川の上流には給水できないことが明らかになったのである。このために工事は中断され、ヴァレは解任される。後にオスマンはヴァレを次のように評している。「彼はスクウェア、イギリス式庭園、小さな公園なら造成できるだろう。……しかし、ブローニュの森の改造は彼の能力を越えている。」と<sup>2)</sup>1854年にオスマンはジャン・シャルル・アドルフ・アルファン (Jean-Charles-Adolphe ALPHAND, 1817-91) を呼び寄せ、緑地の改造、建設の責任者とした。彼は以後オスマンが県知事を解任される1869年までこの責任者の地位を離れず、パリの緑地建設を進めていく。

改造以前のブローニュの森は写真1のように他の森と同様に林内を直線の園路が交差していた。新たに実行された改造案は、川のかわりに6mの高低差を持つ二つの池を作り、その間に滝を作って水を落とし、そしてそれらの周囲に園路を巡らすという案である。この案が実施された後、写真2に見られるように森全体が改造の対象とされ、実施された。まず直線部分には植栽され、かわりに曲線の園路が、馬車用、乗馬用、歩行者用の三種類の用途にわけられて建設される。小川を森の中に巡らし、池を穿ち、滝を造る、高木、低木、芝生を新たに配置する。カフェ・レストランなどの休憩施設を作る、森全体をきらびやかな柵で囲う以上が改造の主だった内容であり、総面積は846haに及んだ。また、これは重要な点ののだが、森の内部にいくつかの有償の施設が建設される。森の西南部セーヌ河畔のロンシャン (Longchamp) と呼ばれていた土地をフランス馬種改良奨励協会 (Société d'encouragement pour l'amélioration

des races de chevaux en France), 通称ジョッキークラブ協 (Société du Jockey-Club) に貸与し、この協会は競馬場を建設した。ロンシャン競馬場である。開場以来、競馬を見る趣味は広がり大人気を博するようになった。またその他に、いろいろな小施設をこじんまりと集めた有料施設、プレ・カタラン (Pré Catalan), 国外の動植物を集めた園地、野外スケート場、貯氷庫が建設された。特に注目されるのはプレ・カタランである。パリ市がある投資家にプレ・カタランと呼ばれている森の中の土地を貸与し、彼は土地に

有料の施設を建設する。8haの凹状の土地を芝地とし、花や低木で装飾したその敷地内にオーケストラのためのロンド(丸屋根の円形の建物で、柱列で支えられ、壁はなく、内側でオーケストラが演奏し、聴衆はこの周囲で音楽に耳を傾ける)、ビュッフエ、ピアホール、写真館、奇術と人形劇のための魔法の劇場、花の野外劇場、乳製品店、水遊館などを配置した<sup>3)</sup>1856年に開業した一種の遊園地のようなこの企画は人気を呼び、大成功を収めたのだが、収入の不安定さや夜間の照明にかかる膨大な出費により2年後にこの企画はつぶれた。1861年にはパリ市にこれらの施設が移管され、その後は無料で開放された。

ブローニュの森の改造計画が緑地計画の中で最初のものであり、また開園と同時に多大な人気を博し、大評判になったゆえにこのように詳しく説明したのだが、自然に対して孤独やロマンティズムを求めた18世紀の散策の場や現代の公園とはかなり違い、19世紀中葉に改造されたブローニュの森はこのように賑やかな場所だったのである。

この森の改造中、パリの街中ではスクウェアが造られる。スクウェアとは道路

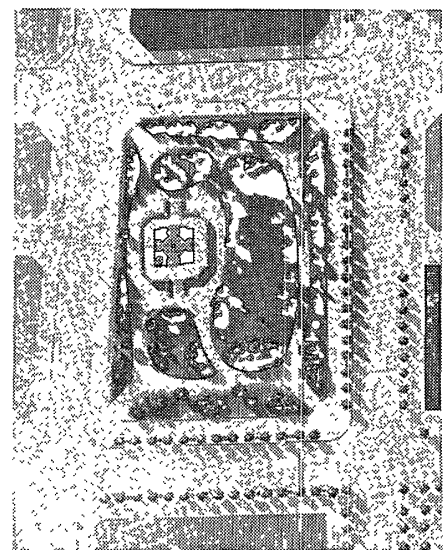


写真-3 サン・ジャック スクウェア

の広い交差点などに柵に囲まれて造られた小規模の公園であり、イギリスのスクウェアを参考にして建設されたが、イギリスと違い、一般に開放され、誰でも利用することができる公園である。1856年にはサン・ジャック・スクウェア (square Saint-Jacques, 0.5ha), 翌年にはタンプル・スクウェア (square du Temple, 0.75ha) が建設される。両者とも曲線の園路と広い芝生から構成されており、写真3のように高木、低木、草花が配置されている。タンプル・スクウェア

ではさらに池とそこに水が注ぐように岩組みされた滝が造られた。

ブローニュの森の改造は1858年に完成するが、この年、パリの東側、つまりブローニュの森と反対の側にあるヴァンセンヌの森 (bois de Vincennes) の改造が決定される。1860年に工事が始まり、1865年に終了するのだが、その内容は全体としてブローニュの森とよく似た構成をとっている。しかし、大きく異なる点がある。それは総面積901haにのぼるヴァンセンヌの森が二つの部分にわかれていることである。はさまれた区域には大砲射撃演習場及びヴァンセンヌ城駐屯部隊演習場などがあり、移転させることができなかった。さらに学校用にも敷地を提供させられる。このようにヴァンセンヌの森の改造はより困難であり、その内容もより地味になったのだが、オスマン自身もブローニュの森の成功におよばないと述べている<sup>4)</sup>

1859年にはスクウェアが4ヶ所で建設される。いずれも内容は前述のスクウェアと同様である。

モンソー公園 (parc de Monceaux) は1778年に王族の一員であるフィリップ・ドルレアン (Philippe d'ORLEAN, 1747-93) によりパリの北西部に造られた公園が母体である。1860年にパリ市が道路を通すために庭園全体を取得し、その約3分の1にあたる8.6haを公園に改造する。工事は翌年1月に開始され、9月に終了する。なだらかな起伏が造られ、長い間枯れていた水が流される。滝をなす岩組の中にはグロットが設けられ、ロトンドは修復された。池も同様である。この公園も優雅な鉄柵を周囲に巡らし、門もまた鉄柵で造られている。オスマンはこの公園を「パリで最も豪華で、最も上品なもの」と述べている<sup>5)</sup>

1860年にパリ周辺の11の自治体がパリに吸収合併さ

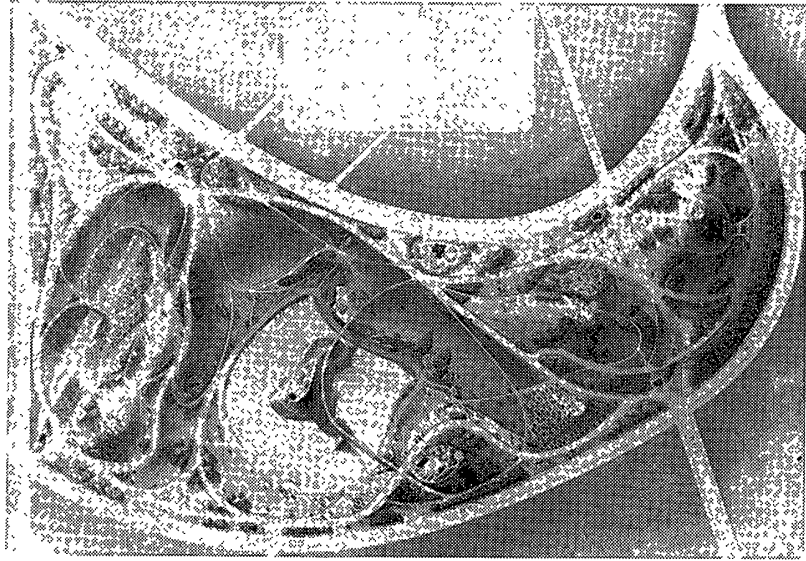


写真-4 ビュット ショモン公園

れる。この結果、今日のパリ市の範囲を形成するのだが、下町であった19区と20区あたりに新しく公園を造成した。採石場であり、動物の死体を解体する作業場でもあり、また同時に尿尿捨て場でもあったビュット・ショモン (Buttes Chaumont) にである。この計画は1862年に決定され、64年に工事が始まり、難工事のために67年にやっと完成する。これが面積約25haのビュット・ショモン公園である。この区域は傾斜地にあるため、その特徴をいかして芝地や樹林、園路が写真4のように配置され、山岳地域の風景の様相が形成された。この公園のシンボリックな存在は池の中に塔のように高くそびえたつ島である。岩を積み重ねた、高さ20mを越える人工物であり、頂上にはロトンドをのせ、橋が二本かけられている。付近には採石場の跡を利用してグロットがつくられ、また落差が35mあるカスケードも造られている。これ程の起伏にもかかわらず、主要な園路は馬車が通れるように設計されている。

合併によるパリ市域の拡大は新しい区にスクウェアを建設することを促がす。1860年以降オスマンの解任まで16のスクウェアが造られたが、その中の6ヶ所のスクウェアは新しい区に建設された。その内容は前述したスタイルを踏襲しているが、アール・エ・メティエ・スクウェア (square des Arts et Métiers) だけが異なっている。樹木を五ノ目型に植栽し、シンメトリーの構成からなっているのである。1869年のオスマンの解任の時にはさらに三ヶ所のスクウェアが建設、計画中であった。

さて、ビュット・ショモン公園の建設終了後、モンソリ公園 (parc de Montsouris) の建設が始まる。パリの南部に位置する15.8haの建設は長びき、1878年にやっと完成する。ここもビュット・ショモン公園と同様

に傾斜地だが、中央を南北に鉄道が貫き、敷地が東西に二分されている。このために東側は滝、小川、池を中心に、西側は広々とした芝生を中心に構成された。芝生地の高台には1867年パリ万国博覧会のためにチュニジア総督の宮殿を模倣して建てられたチュニジア館が移築された。

以上が第二帝政期に創造あるいは改造された緑地であり、ほぼ年代順に並べてある。これらの他にも、幅の広い並木道が建設されているし、また幅20m以上の道路には並木道となるように樹木を植栽するという緑化政策が行なわれている。

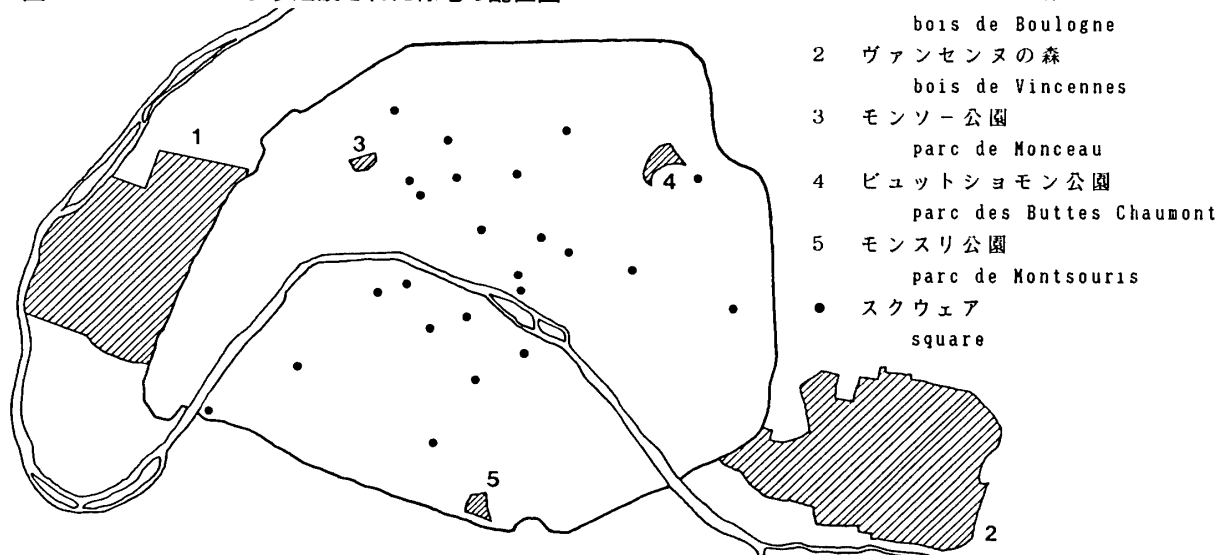
### 3. 緑地のシステム化

これらの緑地全体を見わたすなら、面積により三つのタイプに区分されることが明瞭に見てとれる。まず900ha前後のブローニュの森とヴァンセンヌの森が一つのグループを構成し、次にモンソー公園・ビュット・ショモン公園、モンスリ公園と、8.6haから2.5haにかけての公園がグループを形成している。そして0.2haから2.5haのスクウェアがまたグループをなしている。このように、面積と数という点から見るなら、森—公園—スクウェアという序列がつけられ、さらにその後には並木道がつけ加わる。つまりヒエラルキーを持ったシステムを構成していることが容易に見てとれるのである。これを第一の特徴とすると、第二の特徴は緑地の位置関係にある。図-1はオスマンが創造あるいは改造した緑地を地図上におとしたものである。まず広大な二つの森がパリの東西に位置し、中規模の公園が北西、北東、南にバランスよく置かれている。そして規模が小さいスクウェアは市内に空地ができしだい建設された。このように緑地はパリの中に均等にちりばめられているのであり、都市内のあらゆる地域の平均化を狙っていると言える。この意図から

逆に緑地の内容を見ていくなれば、緑地はなるべく同様のものが望ましくなる。これが緑地のデザインにおいてイギリス的なものがほぼ一律に使われている理由の一つであろうし、またこのことはフランスワーズ・ショエ教授が「均一な全体性を創出するための緑地の中性化」と呼んでいることに他ならない<sup>6)</sup>。以上のように二つの点により緑地のシステムは成りたっているのである。

それでは都市改造の他の計画と緑地計画はどう関連しているのだろうか。まずオスマンによる都市改造の特徴だが、彼以前の時代のパリに見られるような市街地の周縁に新たな区画をつくるという手法を採らず、中心部から周縁まで市街地を全体的に把握し、改造しようとした点にある。そのために彼が最初に指示したのはパリ全体の測量（レベル測量も含む）であった。これはパリにおいて初めての測量であり、これが根本的な都市改造を可能にしたのである。またこの結果、ブローニュの森の最初の計画の欠陥が明らかになったのである。オスマンが進めた計画は、一口で言うなら、中世的な市街地を払拭し、新しい街を創ろうとするものだった。そのためにまず、幅の広い直線の街路を市内中に巡らす街路計画があり、そして全く不十分であった上・下水道を完備しようという計画があった。これら二つの計画に緑地計画を加えた三つの計画が都市改造の主要な軸となっているのである。街路計画、上・下水道計画にもそれぞれ街路の幅の違い、水道管の大きさの違いが計画されている。つまり、その機能上、ヒエラルキーを持ったシステムとして考えられ、造られているのである。オスマン自身はこの点をレゾー（réseau：網という意味）という言葉で説明しているが<sup>7)</sup>これは現代におけるシステムという単語と対応させて考えてよい。また、位置関係だが、これらの二つの計画も全市内を均一化するように計られているのである<sup>8)</sup>。このことは、この三つの計画が、互いに関連

図-1 オスマンにより建設された緑地の配置図



を持たせながら、同等に計画されたことを物語っており、緑地計画はオスマンによるパリ改造において他の二つの計画と同程度の重要性を与えられていたことをも物語っているのである。

#### 4. 緑地のもった意味

さてこの緑地計画の目的はどんな点にあったのだろうか。そのためにまず19世紀における都市の状態を見ていきたい。

19世紀に入るとフランスでは産業革命が進行していく。都市には工場が建ち、農村から人々が労働者として都市に集まってくる。パリの人口は1801年には約55万人だったのだが、1846年には105万人に達しており、ほぼ二倍に膨らんでいる。人口増加の傾向は大規模な都市改造が行われる第二帝政期においても続いていく。急激な人口の集中・増大は当然のことながら都市の環境の劣悪化を招き、特に衛生面の問題が深刻になる。そしてまた産業革命の進行は、原料及び大量生産物の輸送、労働者の往来という点で、細く曲りくねった道からなる中世的な都市を根本的に変えていくのをよぎなくするのである。パリ改造計画は19世紀前半にもたてられ、何本かの街路が建設されたが<sup>9)</sup> 根本的な改造には程遠く、問題を解決するにはいたらなかった。これらのことがナポレオン三世とオスマンに都市改造を行わせる源動力となったのである。

この緑地計画の目的なのだが、この点についてナポレオン三世とオスマンの間に若干の相違が見られる。ナポレオン三世は緑地の存在意義に対して道徳的效果と衛生状態の改善を上げているが、オスマンは衛生状態の改善しか考えてはいない<sup>10)</sup> 19世紀前半のパリは上・下水道が未発達であり、街路は狭隘で入り組み、ゴミや汚物があふれ、悪臭が漂っていた。1830年代にはコレラの大流行にみまわれ、約18000人ぐらいの人々が死亡している。衛生状態の改善はこの流行以前から主張され続けてきたことなのである。オスマンが緑地建設を押し進めたのはあくまでもこの改善の一環としてなのであり、悪臭のない、きれいな空気を吸える場所を建設するのが目的だったのである。そしてナポレオン三世とオスマンの相違は、後者がより徹底して現実に即して問題を考えたことによるのである。

このように衛生状態改善のための場所としての認識が第一にあるのだが、一方で緑地を訪れる人々がその緑地をどのように利用していたのかという問題が同時にでてくる。緑地はその存在そのものに意義があるばかりではない。都市内に生まれた全く新しい場所がどう使われたかという点に関心もたれるのは当然のことである。

この時代によく使われた言葉の一つにプロムナードゥ (promenade) がある。元来、散歩や散策の意味で使われていたし、現在でもそうなのだが、次に第二の意味と

して散歩の道筋、散策の場所を示すようになる。アルファンは自らが担当した緑地を解説し、その詳細な資料を添えた本を出版しているが、その本のタイトルに「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」(Promenade de Paris : 「パリの散歩道」という意味) という名をつけている。彼は緑地総体をプロムナードゥとしてとらえていたのであり散歩を楽しむ場所と認識していたのである。これが行政の立場からみた緑地の姿なのであった。

ところで緑地のデザインに関してだが、写真2, 3, 4をもう一度見ていただきたい。なだらかな起伏のある芝地、曲りくねった川、曲線の園路など、一足先に造られたイギリスの公園のデザインを採り入れている。そしてさらに、それはラウドンの主張したガードネスクのフランスへの適応にすぎないとか、フランスのジュラ (Jura) やヴォージュ (Vosges) 地方の谷の景観に似ているという指摘もなされている<sup>11)</sup> しかし一見しただけでもある理想化された自然景観を具体的に作りあげていることは明白であるし、現実以上の、つまり現実にはない景観をつくっているのである。緑地内では芝地の周辺には低い半円形の柵がおかれ、立入禁止となっていることが多いが、この点も景観を重視した結果のあらわれである。すなわち、芝地を利用する、使うことよりも芝地を含む空間を眺めることの方に、つまり視覚にうったえる景観の方に重点をおいているのである。しかし、一方でこの景観を生み出すにはある程度の広さを必要とする。起伏をもたせた地面をうまくいかすにはある程度まとまった面積が必要だが、スクウェアでは十分な面積を与えることができない。ゆえに起伏がないか、もしくは非常に穏やかなものになっている。バティニョル・スクウェア (square des Batignolles, 1.7 ha) には滝、小川、池が形造られ、水が流されている。地面にはある程度のうねりがあり、人気のあるスクウェアなのだが、よくよく注意して眺めるとちょっとしたアンバランスに気がつく。園路により区切られているうねりのある小区画と平坦である幅広い園路との間にバランスがとれていないの

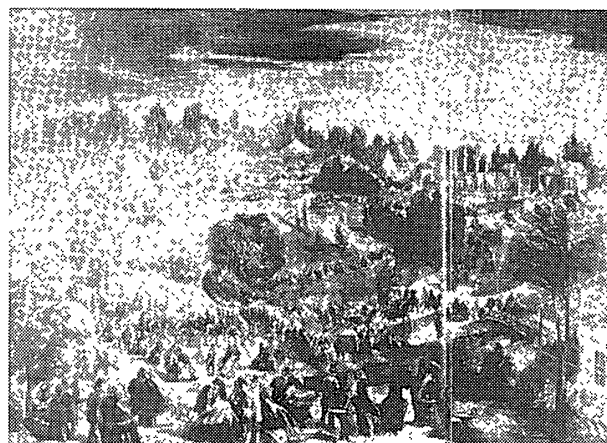


写真-5 改造後のブローニュの森の一風景

である。園路を幅の方向に傾斜させると当然ながら歩きづらく、この方向には傾斜させられない。この幅が傾斜のある小区画に対して相対的に大きく目立ち、アンバランスを引き起こしているのである。つまりほとんどの緑地に採用されたこの種のデザインは森や公園ではうまく適合したが、スクウェアにおいては小面積のためにその特徴をうまく発揮できていない。これが散歩する場としての緑地のデザインの特徴なのである。

さてこれらの緑地の利用に関してだが、プロムナードゥとみなされ、散歩に利用されることはすでに述べた通りである。次の問題は、それがどのような散歩なのか、その雰囲気なのである。当時のプレ・カタランを描いた絵 写真5によく表れているが、散歩している人々はうきうきと楽しそうな表情をしており、陽気に談笑している。現代のように休息を求めて公園に行っているような様子ではない。最初に建造された緑地、ブローニュの森には森や滝、小川、池、芝生が造られたばかりではなく、競馬場やプレ・カタランなど娯楽施設があいついで建設されている。森の内部は決して静寂な空間ばかりが存在していたのではなく、それらの施設に人々が集まり、混雑する賑やかな空間を内包していたのであり、むしろまるで遊園地と言ってもよいようなこのイメージがブローニュの森のイメージを代表していたのである。パリ市民全体のために構想された森なのだが、週末以外に労働者の利用は望みようがなく、従って平日は富裕な階級がなかば独占的に利用する場となっていく。この結果、この森は次第に金持ちと物見高い外国人であふれ、富を見せびらかす場所、彼らが集まる場所ともなっていくのである。<sup>12)</sup> しかも緑地内に建ついろいろな建造物が全く新しい雰囲気づくりを行っている。門番の建物やレストランなどの園内の建築はすべて建築家ダヴィウドゥが設計を担当しているが、イギリスのコッテイジのスタイルやベイウィンドウを積極的に採り入れている。<sup>13)</sup> つまり通常のフランスの雰囲気とは異った雰囲気を森に醸し出しているのである。しかも森は優雅にデザインされた鉄柵により外の世界と区分されている。つまり改造されたブローニュの森は単なる「美しい自然景観が造り出された空間」にすぎないのではない。その外部から切り離され、異化された空間なのである。そしてこの森の改造の目的を考えるなら、どれ程自然景観を強調しようこの森は都市の巨大化により産み出された都市の装置なのであり、都市文化の産物なのである。あるいは、緑地内

部の雰囲気、人々の振舞いを考えるなら、この森は「都市という大劇場の内部にある特別な劇場」<sup>14)</sup>とも言えるのである。そしてこのような見←見られるという関係以外に、いろいろ造り出された施設を楽しむという面を考えるなら、この森は娯楽施設という面を見せてくれるのである。

## 5. おわりに

ブローニュの森の改造以来、公園やスクウェアなどの一連の緑地建設が進んでいくが、それと同時にブローニュの森のイメージがこれらの緑地のイメージの形成に強く影響し、伝播していく。他の緑地もブローニュの森のイメージを引きずった視線で見られていくのである。つまりこの森の改造により緑地全体のイメージが形成されたと言っても過言ではない。緑地が建設されていくにつれてプロムナードゥは習慣化していき、広がっていく、一連の緑地建設は都市の衛生状態の改善にとどまらず、生活様式の一部を変えていく媒体となったのである。

## 引用文献

- 1) George SAND (1867) : La rêverie de Paris, In Paris Guide. Librairie International. pp 1196 - 1203
- 2) George Eugène HAUSSMANN (1890) : Mémoire du baron Haussmann. vol 3. p 122
- 3) Jean Charles Adolphe ALPHAND (1867 - 73) : Les promenades de Paris. J. Rothschild. p90
- 4) J.E. HAUSSMANN : 前掲書 p 210
- 5) J.E. HAUSSMANN : 前掲書 p 233
- 6) Françoise CHOAY (1975) : Haussmann et le système des espaces verts parisiens, In Revue de l' Art n. 29. p 90
- 7) J.E. HAUSSMANN : 前掲書 p 93
- 8) F. CHOAY : 前掲書 p 93
- 9) Pierre LAVEDAN (1975) : Nouvelle Histoire de Paris. Hachette. pp 327 - 412
- 10) J.E. HAUSSMANN : 前掲書 p 240
- 11) F. CHOAY : 前掲書 p 96
- 12) J.E. HAUSSMANN : 前掲書 p 225
- 13) Théodore VACQUER (1860) : Le bois de Boulogne architectural. pp 3-12
- 14) F. CHOAY : 前掲書 p 94

**Résumé :** Pendant l'époque du Second Empire (1852-70), Paris fut transformée par Haussmann, préfet de la Seine. Il réalisa trois systèmes hiérarchisés : voie, eau (adduction et égout), espace vert. Le rôle principal de ce dernier système était l'amélioration de la hygiène comme Haussmann l'insista. Mais ce système joua aussi le rôle pour avoir l'habitude de se promener, et de se divertir aux espaces verts, c'est-à-dire pour changer la vie urbaine.